



優秀賞

当たり前をつくる仕事

なかの あゆむ
中野 歩夢 [金沢市立工業高等学校 土木科 3年]

今当たり前だと思っている生活の裏には、多くの人が汗水を垂らして働きこの世界を作っています。その世界にただ生きているのではなく、人が住みやすく生きやすい世界を作ることに興味を持つことが重要だと考えています。しかし、土木の仕事はしんどいし汚いと思う人も中にはいると思います。それでも私が土木の仕事をしたと決心した理由があります。

私が現在在籍している工業高校の土木科に入学しようと思った理由は、世界のたくさんの人に利用されている道路や橋を自分自身の手で作ってみたいという興味を持ったことと、県内では唯一の土木科があるという所に魅力を感じたからです。私たちの暮らす石川県では他県に比べて地震が起りやすく、普通の道路よりも強度のあるものを作る必要があると思います。そのために必要な知識を学ぶには私が工業高校に入学する必要があると、自分でたくさん調べて出てきたのが現在の工業高校でした。興味は持っていたけど、最初は勉強についていけるのかという不安や、本当にここで良かったのかと思うこともありました。それでも、私の夢である「地域の方々から感謝される仕事をする」ことを実現させたいという気持ちをモチベーションにここまで来ることが出来ました。そして、約2年半でたくさんの専門的知識や技能を得ることで半年後の就職に向かっていきます。世界の人々に利用されている道路や橋を作るには1つの会社だけでなく、いくつもの会社の協力があり作り上げられています。私は当たり前のように道路や橋、ライフラインを作り人々の生活を支える仕事に強い憧れを持っています。それらは人が生きる上で重要な役割を持っています。そんな中、2024年1月1日に能登半島地震が発生しました。毎日当たり前のように通過していた道路が通れない程歪んだり、ひび割れしたりしているのを目の当たりにした時に大きな絶望と強い気持ちが生まれました。日常生活が壊された悔しさと、私たちが暮らしていた綺麗な景観から少し離れてしまったことに対する絶望はとても大きかったです。また、断水や停電により生命に危機的状況が強いられている地域がたくさんあったことは同じ県民として悲痛でした。それでも、綺麗な景観を取り戻したいという気持ちと自分が役に立つ事が出来る最大のチャンスだと思ったことと、1日でも早くの復興をして辛い思いをしている人のために、どんなにしんどくても人々の笑顔を取り戻し、たくさんの人々を支えることが出来る土木の仕事をしたと決心しました。

今まで通りの石川県を取り戻すためだけでなく、突然の自然災害による崩壊を防ぐためにもこれからの半年間は日々の学びを大事にしながら、夢である「地域の方々から感謝される仕事をする」を達成させると共に、人々の当たり前を守れる人になりたいと思います。





優秀賞

それでもやっぱり

みやした たくろう
宮下 太久郎 [金沢市立工業高等学校 土木科 3年]

私は高校の友達とこんな話をする。「この学校で一番すごい科はどこなのか」この話になった時いつも土木科だけが一番最初にすごくないと言われる。機械科は車を電気科は電気を電子情報科はスマホを建築科は家や建物などを武器として挙げてくる。私はダムや道路、トンネルなどを武器に挙げるが他の友達に「それって地味だね」と言われる。いつもそんなことないと思いがながらこの話をしている。

私が工業高校の土木科を志望した理由は親戚のおじさんが土木関係の仕事をしていて私が進路に困っていた中学二年生の時に現場で働いている姿を見させてもらったことがきっかけで高校では土木を学びたいと思ったからである。だが決め手はこれだけではない。その時おじさんはこんなことを言っていた。「建物を建てるわけでもなく設計をするわけでもなく地味な基礎の作業だけどやはり建物が建った時にはとても達成感がある」と。この言葉を聞いた時に私はとてもかっこいいと思った。その思いを胸に私は土木科に入学した。高校で学ぶ土木工学はどれも新鮮でますます土木のことが好きになった。そんな矢先土木科は地味と言われた。私は意外だった。こんなにもかっこいい土木の仕事を地味と言われるなんて。理由を聞いてみると目立たない仕事、すごい発明をしていないなど色々なことを言っていた。考えてみればそう言いたい気持ちもわかる。何かを発明したり、建物として目に見えて目立つような仕事の方がかっこいいのかもしれない。だがその目立つ仕事を陰ながら支え、地味と言われてもなくてはならない存在というのもとてもかっこいいと思う。さらに高校に入ってから土木を好きになった出来事がある。それは1月1日に起きた能登半島地震である。私は石川県に住んでおりこの地震を経験した。私の地域では被害があまりなかったが能登半島はとても悲惨な状態になってしまった。建物は崩れ、道路も壊れた。こんな状況でもすぐに動いたのが土木を仕事としている人たちである。救援部隊がすぐに現地に行くことができるように壊れた道路を整備したり、建物の下敷きになっている人を助けたり。私はその時まで土木という仕事は誰かを助けたり、救ったりする仕事では無いと思っていた。だが実際は違った。人の命を助け、たくさんの人を救っていた。こんなかっこいい仕事は他にあるだろうか。

話を戻すと「どの科が一番かっこいいか」やはりどの科も違ってどの科もいい。だが特別私が土木にかける思いは人一倍強い。この強い思いを掲げこれからの土木作業に情熱を注ぎこれから多くの人を支えられるような存在になるために技術を磨き、たくさんの人命やこれからの時代を支える建物の基盤を作っていく、これからの土木業界を支える柱のような存在になりたい。

